

新住岡夜見選集 第一卷 僧伽の誕生 目次

口絵

発刊の辞 *i*

凡例 *xii*

序章 おいたち

一 宿善…………… 3

二 煩悶…………… 4

三 信の火…………… 6

第一章 親しい若い皆様よ

一 親しい若い皆様よ…………… 9

二 若き同胞よ…………… 18

### 第三章 清く生きようとする願い

七	生きねばならぬと言う者に……………	94
八	試練の苦杯……………	99
九	逆境のどん底から……………	104

一	無限の世界……………	113
二	清く生きようとする願い……………	115
三	虚栄の悪魔……………	119
四	縛るもの……………	124
五	全て生命ある者よ……………	128
六	決定……………	132
七	全てを救せ……………	148
八	囚人の叫び……………	152

三	活動は勢力の中心である……………	31
四	愛は女子の生命である……………	33
五	継続する事の力……………	39
六	心の感応……………	43
七	光明が見えますか……………	45
八	我は如何なるものぞ……………	48

## 第二章 生きんとする努力

一	生きんとする努力……………	61
二	忍びざる心……………	66
三	人生はついにただ独りだろうか？……………	69
四	謙遜の態度を取れ 敬虔の心をもて……………	76
五	煩惱即菩提……………	80
六	苦痛の中の法悦……………	89

## 第四章 人間性に立脚して

一	囚われたる者……………	159
二	人間性に立脚して……………	162
三	心霊の奥殿に輝ける汝自身の実相……………	166
四	不言の言を聴く……………	169
五	火中の蓮華……………	175
六	大我に生きよ……………	180
七	おちきる境地……………	190
八	ありがたいの一語……………	200

## 第五章 使命

一	年頭……………	209
二	五周年記念大会案内……………	212

三	涙の大会を送る……………	214
四	法難……………	221
五	濁水奔乱……………	240
六	使命……………	241
七	師走雑感……………	258
八	雪の国……………	269

住岡夜晃著作出典一覽	273
住岡夜晃・真宗光明団、関連出版物	277
あとがき	279

私は今二十年前の私を思い出す

人生の無常

大地の矛盾

生きることの淋しさ

そうしたもののが私の上に

苦悶と読書、不平と沈痛

自暴と努力、卑怯と我慢

暗黒と焦燥等々の一切をもたらした

だが

生命の内奥に動く何ものかが

私をついにこの暗黒からつれ出した

二十四歳の夏

信の火はかすかに点ぜられた

私は初めて生きることの歓喜を知った

## 一 宿善

私の生家は、山県郡原村、龍頭山を南に受け、寂しい山里に西南にむけてたてられている。けれども私にはこの寂しい山里の家が一日も忘れられたことがない。この家には、年老いたる父母と可愛い私たちの弟妹が住んでいるからだ。

私は七歳の夏、死が悲しかった。毎晩の様に泣いた。そして、苦しまないで仏の子となった。信心深き父と母とによつて。今考えても涙ぐましいほど懐しい仏の子の生活を続けた。村人は神童だと言った。若死する子だと言った。道を歩く時、必ず仏への花をもち、口には念仏の聲がたえなかつた。

私の幼時は体も弱くて小さかつたし、意志も弱かつたし、肝も小さかつたので、級長にされても、皆のためにあべこべに虐められてさっぱり治まらない。それでも品行は上であるし、世間からは評判のよい子であつた。親もまたそれが自慢らしかつたが、今日から考えると、私の



幼時は怖るべき墮落への道を歩んでいたのであった。郡長さんにごほうびをもらったなどと喜んでゐる時、驚くべし、魂のぬけたお人形が淋しく立ってごほうびを抱いていたわけである。

## 二 煩悶

私が小学校教師である頃、県師の附属小学校に招かれた時、親たちの反対で出られなかった。私はそれを恨んだことがある。今の私にはそれはありがたいことであつたことが知られて来た。私の願いのかなわぬことが幾度もあつた。その度に失望した。

私がまだ二十二歳の時、それは広島市を去ること六里、飯室いひむろ小学校の首席訓導となつて転任したばかりの時であつた。段々と暗くなる心、何が何やらわからなくなつた心、それでも世間的に先生らしい顔をしたい心、複雑な心を持った私は、私の心の声を聞かねばならない時が来た。二十二歳。俺は今、二十二歳。ああ、二十二歳の秋だ。それが今日まで何をしたか。今俺が斃たおれたら汝の一生涯は何であつたのか。私は矢も楯たもともたまらなくなつた。恥たがずかしながら、極端にまで、地位と名誉、立身出世と女とのほしかつた気の毒なほど貧弱な子は、この子に課

せられた宿命らしい灰色の現実の中に「自己」を発見したのだ。

暗い頃から起きて読書しはじめたのは、然り、二十二歳の秋からであった。あれを見よ。歴史の上に輝く古今の聖者、偉人、英雄を！ 彼らはいつたい、何を知り、何を信じ、何を語り、何を教え、何を生活したのか。同じ太陽を仰ぎ、同じ空気を吸い、同じ水を飲んでいて、私だけは何かしら大きな流れに参加せずしてこのまま地上を去ってもいいのか。

いつたい、汝にとって一番大切なのは何か。汝にとって一番、尊ぶべきは何であるのか。「それは汝自身ではないか」。然り、汝自身だ。それであるならば、汝は汝を解け、これ汝に与えられた課題ではないか。汝は今、二十二年の長い間を生きた。しかして汝の獲たものは何であるか。汝が汝のものとして示しうるものは何であるのか。無一物！ そうだ、何も無いのだ。しからば二十二年の生涯は、きれいに棒引きである。零である。こうした悲痛な自己発見の中から、第二の私が生まれた。

私の霊たましいが偶像から開放され、人間として目覚めかけた時、十有余年間の仏は煙の様に消えた。言い様のない寂しさが続いた。その後の私は、深い精進の私ではなくて、私の行いたいままを行った。燃える様な狂う様な内部からの欲求のまにまに、二年間の月日は去った。

けれども、とうとう私にも私を再び静かに見ねばならぬ時が来た。私はじっと私の霊を見つ

めた。そして、熱い涙の幾月は続いた。頭に浮かぶものは何、「私は忠実まじめに生きねばならぬ!」、私には、罪の裁きを受ける時が来た。内的革命に急ぐ時が来た。二年の月日は去った。そして、私は私の内に醜い私の内をいつわりおおせなかった。失ってしまったわね一物を見た。私は救われる外ほかなかったのだ。私は暴風の様な過去に於て、又と二度得られないものを得て来た。

### 三 信の火

人生の無常、大地の矛盾、生きることのさびしさを痛感した彼の胸にも更生の日が訪れた。苦悶と読書、不平と沈うつ、自暴と卑怯、暗黒と焦燥、そうした長い日がおわって信の火はかすかに点ぜられた。それは彼が二十四歳の夏だった。

私が狂風と号したのは私が二十四歳の年でした。何ゆえに狂風と言ったか。それを語れば長いことになります、そのころの私は、私自体の無明煩惱も狂風そのものでしたし、大悲の風もまた私を根こそぎ動かす激しい嵐でした。最初の念仏の夜もまた狂風吹きすさぶ夜でした。

第一章 親しい若い皆様よ